

今年は、世界の主要国で指導者の交代が相次ぐ。東アジアでは、昨年12月に金正日総書記が死去、三男の金正恩氏に権力が継承された。今年1月には台湾の総統選が行われ、国民党の馬英九氏が民進党の蔡英文氏を破って再選された。

# 時標

前者は、「破綻国家」における新独裁者の登場であり、後者は、覇権掌握への意図を露わにする中国の圧力に抗し、台湾がみずからの存在をいかに証すかの住民の意思表示であった。

北朝鮮は日本全土を射程に収める弾道ミサイルをすでに

掌中にしている。これに搭載可能な核爆弾の小型化に成功すれば、日本の対北抑止力は一挙に弱体化しよう。

金正恩氏の登場は日本のリスクを高めた。私は判断する。金正日氏は極度の強権的政治によって党・軍を統率し、「瀬戸際政策」を繰り返して関係諸国から大量の支援を引き出した。米中交渉にも引けを取らない謀略的な独裁者だった。

しかし、この独裁者の明らかな失敗は権力継承の遅滞にある。金正恩氏が後継者として認知されたのは、一昨年の党代表者大会のことだ。

金正日氏が、父親の金日成氏から権力を譲り受けるのに費やしたエネルギーは、尋常なものではなかった。金日成氏が死去した時点で金正日氏は党・軍において並ぶ者なき権

## 東アジア 秩序再編の兆し

勢を手中にしていた。だが金正恩氏には党・軍の掌握力と権威において、祖父と父に及ぶ力は到底ない。

とはいえ、この政治的空白を突いて権力闘争に打って出る指導者は存在しない。金正日氏の時代、反党・反軍勢力への粛清がいかに凄まじいも



渡辺 利夫  
拓殖大総長・学長

のであったかを物語る。金正恩氏には「遺訓政治」の継承以外に当面の選択肢はない。

だが、金正恩氏の統治にはほとんど、<sup>権威</sup>綻びが出てこよう。綻びを繕うには、韓国の哨戒艦「天安」の撃沈事件、延坪島砲撃事件に類する挑発、弾道ミサイル発射、3回目の核

実験などの挙に出る可能性は大にある。

一方、台湾は日本の資源・エネルギーの大半が近海を経由するシーレーンの重要拠点である。中台抗争のいかんによつては日本が立ち往生するリスクがある。

台湾の統治システムは完全な民主主義である。1月の総統選も民主主義的な手続きにのつとつて粛々と進められ、国民党の馬英九氏が得票率51・6%をもって勝利した。巨大市場・中国への経済的接近によつて台湾の未来を開かんとする馬英九氏を住民が支持しての勝利だ、というのはあまりに片面的な評価である。

台湾が主権独立国家だと強調する民進党が政権を握った場合、比較的順調に推移している現在の中台関係が悪化するのではないかと、台湾

住民の不安感がこの選挙結果をもたらしただ。一現状維持を希求する複雑な台湾民意の反映である。蔡英文氏は敗れたとはいえ、45・6%の得票率を手にしたのである。

問題は、ごう慢なナショナリズムを高揚させ、台湾に照準を合わせて無数の短距離ミサイルを沿海部に配備している中国が、台湾住民のテリトリーな「現状維持」心理を讀み解けない場合だ。国民党勝利を中台統一志向のシクナルだと「誤認」して、台湾への攻勢に転じる恐れがないとはいえない。

北朝鮮における金正恩氏の登場、台湾における国民党の勝利。新年を前後して生じた東アジアのこの二つの出来事は、薄氷の上の政治学だという認識をもって事態に当たらねばならない。

わたなべ・としおさん

1939年甲府市生まれ。慶応大卒、同大学院博士課程修了。経済学博士。2005年から拓殖大学長、11年12月に同大総長・学長に就任。開発経済学・現代アジア経済論専攻。山梨総合研究所理事長。東京都在住。